

私の服にはSTORYがある

CLOSE-UP
AYUKO TASHIRO
HER STORY

私と夫の仕事を
差し置いても 東京では
子育てはできないと
した判断は正解でした

田代佳代子さん

46歳

国際的なマリンバ演奏家の
安倍圭子先生と共演します

最高級のコルサートマリンバを前に、恩師であり、桐朋
学園大学教授の安倍圭子先生と、9月23日の共演コンサ
ートに向けて、頻りに練習に出づきは、打合わせや練
習をこなしています。演奏会用に購入したワイワイア
ン・タムのプラスチック、本音に備えます。何かとお世話
になっているヤマハ銀座ANNEXにて。

もうこの子育てに関しては、田舎がいちばんで東京はレベル以下
ということはありません。彼女もそうは言わないでしよう。ただ、
お強欲とかゆとり教育とか言いつつ前に、子供のために飛べるかどうか、

福岡県・久留米市生まれ。6歳の私です。誘われて木琴教室に通ったことがきっかけで、マリンバと出会いました。



安倍先生の演奏を聴いて感動したことから、先生が教授を務める桐朋学園大学に入学。聖子ちゃんカットが懐かしい夏合宿のひとつコマ。



卒業後は同大学の研究科に進み、女性5人のマリンバアンサンブルを結成するなどして、活発に演奏活動を行っていました。

24歳で結婚。夫は演劇科を出て劇団に所属。その劇団で、生バンドの打楽器を担当したことから知り合いました。



26歳で長女を出産。幼い子供を抱えて、東京での生活に疑問を感じ始めた頃。演奏活動にも集中できず、福岡に帰ることを決心。



福岡・久留米で立ち上げたマリンバ教室。少しずつ生徒さんの数も増えて、'99年には初めての発表会を開くことができました。

東京から九州・福岡へ。マリンバ演奏家として将来を期待されていた田代佳代子さんが、生まれ育った土地に帰ってきたのは30歳のときのこと。かたわらには4歳になる娘と、半

年かけて説得したご主人がいました。「夫は役者。演劇だけでは食べていけない、いろんなアルバイトをしていました。私は駆け出しの演奏家。あの頃はほんとお金がかかった。でも、大変だけれど楽しい青春の日々。自分たちが貧しいとか、みじめだと思

ったことは一度もありませんでした。ただ、子育てには、あまりにも環境が悪すぎました」当時住んでいたのは高層マンション。子供の視線で見回すと、壁と、窓の向こうの小さな空しか見えない。緑が見えない。散歩に連れ出せば、蟻の行列におびえる長女。「環境を変えたいと強く思いました。女と生まれ

ところが、東京で役者の夢を追うご主人はなかなか首を縦に振ってくれません。「夫が、考え抜いた末に決断してくれたのは、やはり子供のためでした」福岡での生活が始まってみると、新しい環境の中で自分の居場所を先に見つけたのは、ご主人のほうでした。「地方には演劇人が少ないせいか、とても重宝がられて……。あれよあれよという間にいろんな仕事を頼まれるように」今では大学の演劇科の教授に。一方、子育てという荷物を背負いながら、ゆっくりとした歩みを強いられたのは佳代子さんでした。「福岡に戻ってすぐに次女を出産。その後、いよいよ自分のマリンバ教室を立ち上げようと、チラシを配ってみても、一人の生徒も集まらないのです。ピアノ教室ならまだしも、マリンバなんて、ここでは無理なんだ」と

楽器店の協力を仰ぎなさいというアドバイス。地元楽器店を訪ね、やっと教室をスタートさせることができました。最初の生徒はわずか2名でした。以来15年。思いがけず授かった3人目の子供もまとも育てつつ、マリンバ教室では、小学生から60代までを教えています。これまでの生徒数はべ100人超。音大にも11人を合格させました。九州各地での演奏活動も行っています。そんな佳代子さんに、試練はもう一度、降りかかったのです。3年前の6月でした。高

教室も演奏活動も休み、気力も尽き果てた数カ月……。けれど、佳代子さんの心を溶かしたのは、やはりマリンバの音色でした。「安倍先生のCDをかけていたら、最初は聴こえなかった音が、急に耳いっぱいになり、涙がぼろぼろとこぼれてきました。同時に、何をやっているんだ、すっかりしろ、と父に怒られているような気がしてきました。あの目からは生まれ変わりました。それまで、あのまま東京にいたら……。という気持ちを引きずりながら、自分にできる範囲のことをやってきたけれど、父の死を境に、もつと積極的に動き始めました」佳代子さんの並々ならぬ熱意が周りを動かし、福岡の中心地・天神にも教室を開講することができ、長年の夢であった安倍先生との共演も実現。まるで、種を蒔き、時間をかけて育ててきた植物が花を咲かせ始めたように。「この場所で頑張ってきたからこそ、今の自分がある、そう思えるようになったのです」

子供がのびのびするためにも
私もノーマルでいられる
場所が必要だったんです



ほかの楽器もそうでしょうが
マリンバの音には 私の
生活が鳴り響くんです



亡き父の写真は、いつも肌離れず持ち歩いています。つらいつまは髪でしたが、今では、父が私を守り、行方へき方向に導いてくれているような気がします。



舞臺で演奏するときの衣装は、ほとんどがワイワイアン・タム。普段は着ないような華やかなトップスを選び、黒か白のパンツと合わせます。



演奏のときに履くのはソニアルダンス用の靴。理由はすべらないから、ゴールドと黒の2足あればどんな服にも合います。かかとか鳴らないよ、カハイをつけて。

子育ての思い出がいっぱい
筑後川の河川敷にて

高校1年生の次女、中学2年生の長男と、昨年、長女が神戸の大学に進学し、現在は2人の子供と夫とともに、この川のほとりで暮らしています。近々にはテニスコートもあり、幼い頃の子供たちの遊び場として、数え切れないほど家族が訪れました。普段着はほとんど「DAGONAL」を購入。